

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520171

研究課題名（和文） 林羅山を中心とした江戸初期儒学者の日本古典文学研究についての考察

研究課題名（英文） Consideration about the studies of Japanese classical literature performed by Confucian scholars in early Edo period (mainly Razan Hayashi)

研究代表者

川平 敏文 (KAWAHIRA TOSHIFUMI)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：60336972

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸初期の儒学者・林羅山の徒然草注釈書『野槌』の精査するものである。羅山および当時の儒学者は、中国の思想や文学のみならず、自国の古典文学についても大きな関心を持っていた。そしてその方法論は、それまで日本で行われてきた古典学とは違って、儒教の人間観や学問観にもとづく、全く新しいものであった。これは、後代の古典学への展開を考えるうえでも注目すべき問題である。

研究成果の概要（英文）：This study is an investigation of “Nozuchi”, an annotation book of “Tsuresure-gusa”, written by Confucian scholar Razan Hayashi in early Edo period. At that time, almost Confucian scholars (including Razan) had a big interest in not only the thought and literature of China but also the classical literature of their own country. Their methodology was totally different from the classic studies performed in Japan till then. It was a completely new one based on Confucian view of human and study. This is also an important matter in thinking about the development of classic studies into the following age.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学、徒然草、注釈史、林羅山、和学

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、わが国の古典随筆の白眉といわれている徒然草を、江戸時代の人々がどのように注釈し、受容してきたかという問題を中心に研究を進めてきた。徒然草は、周知の通り鎌倉末期に成立した作品である

が、その本格的な流布は意外に遅く、江戸時代の幕開けとほぼ同時であった。よってその注釈活動には、儒学・仏教・歌学・神道・俳諧など様々な分野の学者が参画しており、江戸時代の思想や文学についての様々な問題点を、彼らの多様な「読み」の中から抽出で

きると考えたからであった。

徒然草^{はたそうは}注釈書の嚆矢とされるのは、医師・寿命院秦宗巴が著した『徒然草抄』（1604年刊）である。本書に次いで刊行されたのが、本研究において主に取りあげようとしている、儒学者・林羅山の『野槌』（1621年序刊）であった。本書については、その注釈内容が、当時の通俗的な小説・雑筆類（いわゆる仮名草子）創作の場でしばしば利用されていることが、すでに指摘されている（神谷勝広『近世文学と和製類書』（1999年）ほか）。申請者もまた、本書がその排仏思想的なスタンスによって、後続の徒然草注釈書に重大な問題提起をなし、それによって注釈界に一種の思想論争が巻き起こったことを考察した（「徒然草をめぐる儒仏論争—江戸文芸思潮一斑—」、『雅俗』第8号・2001年）。しかしながら本書には、いまだ説明されざる重要な問題が残されている。それは「儒学」と「日本古典文学」という一見親和性のない二つの要素が、なぜ、どのように、彼の中で連結することになったのかという問題である。

林羅山を始めとする江戸初期の儒学者たちが、漢学の研究をその本義と考えていたことは疑いない。四書五経といわれる中国古典や医学書の本文校訂および注釈、さらには彼らが名目上は余技として楽しんだ漢詩文の類は、まさしく枚挙に暇がないほどの分量が残されている。しかしながら彼らは、このような漢学・詩文の業績を残した一方で、実は日本の歴史や思想・文学についての研究書をも、少なからず編述していたのである。

つとに小高敏郎は、これら江戸初期儒学者たちの日本文化研究の中に、自由討究の気風、共同研究法、合理的実証的な研究といった、江戸中期以降に展開する国学的学風の萌芽が認められると指摘している（『近世初期文壇の研究』82頁、1964年）。けだし卓見であるが、しかしながらこの指摘は、なぜ儒学者である彼らが「日本」に向き合う必要があったのか、あるいは彼らの研究成果が具体的にどのように後代の日本古典文学研究に影響を与えたのか、などといった問題についての、十分な議論や検証を欠いたものであった。ゆえにそれは、単なる問題提起として棚上げにされたまま現在に至っているのである。

2. 研究の目的

本研究は、江戸初期の儒学者・林羅山の徒然草注釈書『野槌』の精査を足がかりとしながら、羅山および当時の儒学者が、自国の古典文学についてどのような認識をもち、またそれをどのような手法で研究したかを明らかにし、さらには、彼らの仕事が当代および後世の古典文学研究に対し、実質的にどのような影響を及ぼしたかについて考察を展開するものである。具体的には、以下のような目的を掲げたい。

(1) 『野槌』の成立過程およびその諸本の問題を明らかにする。『野槌』稿本二種、および刊本の諸本調査を通じて、羅山の注釈意識の推移、および本書流布の実態を解明する。

(2) 羅山の日本古典文学に関する知識の幅や精度を明らかにする。『野槌』の注釈に引用される文献を精査し、その引用傾向や引用の精度などについて考える。

(3) 前項と関連するが、羅山および江戸初期儒学者の日本古典文学に対する基本的な立ち位置を明らかにする。彼らの和文・和歌資料を中心としながら、その日本古典文学に対する言説を調査・分析し、伝統的な歌学との相違点を明らかにする。

(4) 羅山および江戸初期儒学者の日本古典文学研究が、当代およびその後の研究史にどのような影響を与えたのかについて考察を展開する。下河辺長流や契沖といった学者の残した言説を中心に、用語・方法論などの面からその具体的影響を探る。

3. 研究の方法

(1) 書誌データベースの作成

国文学研究資料館がインターネット上で提供している「日本古典籍総合目録」によって検索すれば、『野槌』には自筆稿本を所蔵する二つの機関と、刊本を所蔵する30以上の機関があることが確認される。諸本間の異同を確認するために、できるかぎり多くの所蔵機関へ赴いて書誌調査を行う。採録する主な書誌事項は、書型、冊数、序跋、行数、字詰め、丁数、奥付、備考など。また必要に応じて、マイクロフィルムまたは紙焼写真などによる複写物を申請する。但し写真撮影が許される場合は、デジタルカメラによって撮影

し、データ整理・保存を効率的に進める。

次に、上の調査によって得た結果をデータベースとして入力・整理してゆく。但しこれも作業をより効率化するために、持ち運びに便利なモバイル型パソコン1台を購入し、なるべく書誌調査の現場で直接入力してゆくようにする。

(2) 『野槌』注釈語彙索引の作成

上記の作業と並行して、『野槌』注釈語彙索引を作成する。『野槌』の注釈部分から、人名・書名の事項を抽出してデータベース化し、五十音順に並び替える。語彙抽出作業には、江戸時代の文学についての専門的な知識を有する大学院生4、5人の助力を得る予定である。1人30時間ほど、主に夏季休暇を利用して作業を行ってもらおう。

提出された原稿は申請者が目を通して補正してゆくが、その際、羅山の引用する文献が、例えば漢籍であれば、中国や朝鮮から輸入された原書なのか、それとも日本で翻刻されたものなのか、また日本の文献であれば、どの系列のテキストに拠ったのか、などの点に注意しながら、それを備考として記入しておく。この作業のために、羅山が特に引用することが多い中国・宋～明代にかけての類書や随筆、あるいは日本古典文学関連資料が必要となると思われるので、手元にないものについてはそれを購入する。

なお、もし計画通りの原稿が仕上がらなかった場合は、次年度の素稿作成者の人員を増やす、あるいは申請者が原稿作成段階から加わる、などの措置を考える。

(3) 羅山の日本古典文学に関する言説についての調査

(2)の途中経過を踏まえながら、羅山の和文が集成された『羅山林先生外集』（宮内庁書陵部蔵）、羅山ほか彼と交流があった人々の和歌和文を収めた『近代和歌続集』（島原図書館松平文庫蔵）、そして漢文ではあるが、羅山の主な言説を集大成した『羅山林先生文集』（国立公文書館）などの複写物を手に入れ、これらを中心的資料として、彼が日本古典文学についていかなる見解を持っていたかを調査する。方法としては、後に検索や分類がしやすいように、その言説の全文あるいは要点をデータベース上に書き出してゆく。

(4) 江戸初期儒学者の日本古典文学に関する言説についての調査

羅山の日本古典文学に関する言説が、当時の儒学者のそれと、どれくらいの共通点あるいは相違点を持っているかを調査する。この当時の儒学者の日本古典文学に関する言説が採集可能な文献としては、今のところ、人見ト幽『土佐日記附註』、藤原惺窩『惺窩先生文（倭歌）集』、堀杏庵『杏陰集』、那波活所『活所備忘録』、三宅澹庵『澹庵歌話』、『無名野草』、永田善斎『膾余雜録』、江村専斎『老人雑話』などを挙げるができる。このうち半数程度はすでに翻刻や複写物を手元に用意しているが、未所持分も含め、必要に応じて書誌の確認のための調査旅行や複写物の申請を行う。

(5) 下河辺長流・契沖などへの影響についての調査

『長流全集』および『契沖全集』に所収の注釈書・随筆類を中心として、長流や契沖らの言説の中に近世初期儒学者の影響がないかを調査する。また当時の歌学への影響も視野に入れて考察する。

4. 研究成果

(1) 林羅山の和学史上における位置付け

従来の仏教的人間観においては、「情」は煩惱として、基本的には否定すべきものであった。よって、たとえば伊勢物語や源氏物語などの古典も、「好色の戒め」のために書かれたものであるというような位置付けをされてきた。しかし羅山は『野槌』において、儒学的人間観に基づいて、「情」を基本的に肯定する姿勢を見せた。これは、人間の情や欲というものの存在を、限定的なものであったにしろ、正面から容認したという点で、古典注釈史上、画期的な出来事であった。そしてこの姿勢は、後の下河辺長流・契沖らの古典注釈、あるいは当代の文学のあり方にも、少なからず影響を及ぼしたと考えられる。

また徒然草には、後にいわゆる古今伝授の一つとして組み入れられる「呼子鳥」についての言及があるが、『野槌』はその内容を秘伝として隠そうとはせず、版本という形で世に公開しようとした。すなわち、特に和学の世界に色濃く残っていた秘伝主義とは、正反対の姿勢を示したのである。但しこのような

姿勢は、羅山のみではなく、当時の漢学者が一般的に具えていたものであった。こうした姿勢も、長流・契沖らの学問形成に大きく寄与したのではないかと考えられる。

(2) 「つれづれ」の解釈を中心とした江戸前期思潮の研究

徒然草冒頭の「つれづれ」という語は、現代ならば「所在ない」「退屈」などと、どちらかといえばマイナスの語感で訳するのが通例である。しかし江戸前期の徒然草注釈書類をつぶさに当たってみると、基本的には「さびしい」「しずか」などという語感を指摘するものがほとんどであって、現代の語釈と相違する。

特に、寛文期の加藤磐斎『徒然草磐斎抄』は、上のような語意解釈をさらに展開させ、「つれづれ」とは「身心静寂の状態」であるとし、さらに、この「つれづれ」が本作のキーワード（主題）であるとした。そして江戸前期には、この解釈に追随するものも少なくはなかった。

このような解釈が一般的であったその背景には、儒・仏・道は本源的に同一とする、いわゆる三教一致論の盛行という時代思潮の存在が考えられる。この思潮は、一つに林羅山を代表とする儒学者たちの排仏論への反動、一つに当代中国思想の嗜好の流入という、二つの要素によって形成されたと思われる。

磐斎たちの解釈は、このような時代思潮を背景に、三教の共通項である「静」の理念を「つれづれ」という語の解釈に投影して、徒然草を三教一致思想の入門書のようなものとして読もうとした結果ではないか。

(3) 徒然草と江戸前期文学との関係

江戸前期の仮名草子や俳文には、辞句や趣向の面で、徒然草の影響を受けたと思われる作品が多い。当時の注釈書の〈読み〉を手がかりすれば、その影響は、次の四つの視座から分析できる。

① 教訓および述志の側面

たとえば林羅山『野槌』において、政治論的な章段が称讃されているように、徒然草の思想性およびそれを表現する手法は、一部の仮名草子の模範となった。

② 情（特に色欲）の肯定

たとえば徒然草・第三段における「情（色欲）の肯定」の文章は、儒教的人間観においてこの問題を分析した『野槌』の影響（1）

参照）もあって、江戸時代における色欲肯定の論理の形成に一役買った可能性がある。

③ 市隠的／艶隠者的なスタンス

隠者でありながらも世俗について深い関心を抱いているさまが、いわゆる「市隠」（身は市中にあって心は隠逸する者）あるいは「艶隠者」（風流を解する隠者）と目されて、江戸時代の文人のスタンスの見本となった。

④ 文章（特に俳文）の典範

徒然草の文章は、物事を描く際の切り口や言葉の編成において、俳文の形成に影響を与えた。

(4) 「『野槌』人名・書名索引稿」の完成

『野槌』は江戸前期、注釈書としてだけではなく、和漢の故事を豊富に記載する「類書」のようなものとしても多く利用された。本索引の完成により、今後より多くの文学作品において、その利用実態が明らかになっていくだろう。

当面は私家版の形で研究者に配付するが、将来的には『野槌』初版本を底本に、修訂本・再版本などとの校異を付した影印本を発刊し、その巻末索引として掲載したい。

(5) 付記

なお『野槌』書誌データベースについては、研究開始から間もない時点において、別の研究者によってほぼ同趣旨の研究がすでに進められていることを知ったので、これについてはその研究者に一任し、当方の知見も随時供与していくことにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 川平敏文、「つれづれ」の季節、『語文研究』110、査読無、2010、pp. 1-19

② 川平敏文、和学史上の林羅山—『野槌』論一、『文学』11-3、査読無、2010、pp. 58-72

〔学会発表〕（計2件）

① 川平敏文、「つれづれ」考—江戸前期文芸思潮論—九州大学国語国文学会、2010. 6. 6、九州大学

② 川平敏文、江戸人と徒然草—〈読み〉のあり方をめぐって—、名古屋大学国語国文学会、2008. 7. 20、名古屋大学

〔図書〕（計1件）

①川平敏文、他、森話社、江戸の「知」―近世注釈の世界―、2010、pp. 284-306

〔その他〕

ホームページ等

<http://blogs.yahoo.co.jp/kanzanshi>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川平 敏文 (KAWAHIRA TOSHIFUMI)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：60336972

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：